

男子看護学生の母性看護学実習における現状と教育的な関わりに関する文献検討

Literature review on male nursing students' current status and educational involvement in maternal nursing practice

坂本 保子 (Yasuko Sakamoto), 藤邊 祐子 (Yuko Fujibe), 高橋 雪子 (Setsuko takahashi)

要旨

本研究は、男子看護学生の母性看護学実習における現状を把握し教育的な関わりへの示唆を文献より明らかにすることを目的とした。検索ツールは、医学中央雑誌 web、医学文献検索サービス CiNii を用いて「母性看護」「男子学生」「母性看護実習」をキーワードに会議録を除く国内文献の37編の中から研究目的に合致した7編の内容分析をした。その結果として、【男子学生の母性看護学実習の現状】【母性看護学実習に対する男子学生自身の思い】【母性看護学実習における男子学生への教育的関わり】の3つのカテゴリーが抽出された。中でも母性看護学実習に対する男子学生自身の思いは、実習前、実習中と実習後にそれぞれ変化していることが分かった。そのため男子学生の、不安や困難感を取り除くことが学習効果をあげる為に重要であり、学生自身が肯定的体験を多く経験し主体的能動的に学習できる教育的関わりが求められる。

キーワード：母性看護，男子学生，母性看護実習

Key Words: maternity nursing, male student, maternity nursing practice

I. はじめに

1948年保健師助産師看護師法（以下保助看護法）が制定され臨地実習において男子学生の実習では、産婦人科実習は精神科実習と読み替えることができた。しかし、男女平等参画の観点により1989（平成元）年の「保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部改正」では、男子学生の産科実習を実施するようになった。

1994（平成4）年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が施行され看護系大学など高等教育の充実、高齢化の進行、医療サービスの高度化・多様化などに伴い、対応できる質の高い看護職員を確保すべきという要

請が高まった。この方針に沿って看護教育カリキュラムの改正、看護系大学・大学院の設置が進められることとなった^{8) 9)}。これを契機とした看護系大学の急激な増加が認められ、1993（平成3）年に11校であった看護系大学は2018（平成30）年には265校に急増している¹⁰⁾。日本看護協会¹¹⁾によると男性看護師の総数は2008（平成18）年は約38,000名であり2016（平成28）年には約84,000名と増加している。

本学は、2016（平成28）年に4年制看護学科が新設され4年目を迎えた。本学の在学学生205名のうち男子学生は1学年6名、2学年14名、3学年11名、4学年9名の男子学生

が在学している。本学のカリキュラムでは、2年次後期に母性看護学概論、3年次前期に母性看護学援助論を学び3年次後期から母性看護学実習に入る。

工藤ら¹²⁾は、「男子学生は、講義・学内演習・臨地実習と学習内容が進むにつれ母性看護に不具合感を感じている」と報告している。本学の母性看護学実習においては、男子学生の実習を受け入れていない施設がある。また男子学生一人で受け持ち褥婦のケアはできない為、女子学生に比べ制限が多いことが現状である。

以上より男子の看護学生は増加しているが、臨床での実習受け入れには困難があり、男子学生自身も実習しにくさがあると推測される。

そこで本研究は、男子学生の母性看護学実習における現状を文献より明らかにし、母性看護学実習における男子学生への教育的な関わりへの示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

文献研究

2. 対象文献の抽出

文献は、2008年から2018年まで会議録を除く原著論文、総説、研究報告、一般を対象とした。検索は、国内文献について医学中央雑誌Web、医学文献検索サービス、CiNiiを用いた。キーワードは、「母性看護」「男子学生」「母性看護学実習」とし37件がヒットした。そのうち、研究目的に合致した原著論文および研究報告の中から原著論文7編を対象とした。

3. 文献の分析方法

検索された文献を精読し項目ごとに内容をカテゴリー化し、研究者間で検討した。

4. 倫理的配慮

著作権の侵害にならないよう、引用、参考文献および参考個所を明確に示す。

III. 結果

1) 対象となった文献

検索の結果、7編が抽出され原著論文は、医学中央雑誌web 2編、医学文献検索サービス4編、CiNiiの1編であった。発表年度別文献数及び文献番号を表1に示した。

表1 発表年度別文献数及び文献番号

発表年	文献番号
2014	1) 2)
2015	4)
2018	3) 5) 6) 7)

2) 文献の内容

研究内容を類似性により分析した結果、【男子学生の母性看護学実習の現状と課題】【母性看護学実習に対する男子学生自身の思い】【教育的関わり】という3つのカテゴリーに分類した。それぞれの論文の代表者、発行年、対象者、目的、考察を表2に示した。

次にカテゴリー別について述べる。

1. 【男子学生の母性看護学実習の現状】

対象論文1件(表2の論文番号1)

羽田野ら¹⁾は、「性差からくる不安やとまどい・緊張などを感じながら実習を行い、他の看護学実習に比べ対象となる妊産婦の年齢層が若く、ケアも乳房や陰部など羞恥心を伴うものが多い。20歳前後の男子学生に対して対象が抵抗感や負担感など否定的感情を持つことは避けられない。」と述べている。また、「男子学生の母性看護学実習を受け入れる施設の状況・意識・態度では、分娩後の入院期間の短縮や高齢妊娠・出産や不妊治療後の妊娠・出産などハイリスク妊娠・出産が増加、対象者の権利擁護などで実習をすることが難しい。男子学生の実習施設確保と実習展開が課題であり、スタッフ自身も男子学生を無意識に男子という性で見ている部分があるため学生も実習に消極的になる」¹⁾と述べている。

2. 【母性看護学実習に対する男子学生自身の思い】

対象論文4件(表2の論文番号2, 3, 4, 5)

母性看護学実習に対する男子学生自身の思いは、実習前、実習中、実習後に分けて検討した。

1) 『実習前』

贄²⁾は、母性看護学実習における男子学生の思いを単語頻度解析での抽出の結果、男子学生は実習前に「男性一疎外感」、実習一行く+行きたくない、「病棟に入ること」が抽出され「対象者からの承諾などから性差による疎外感からの不安を抱えている」と述べている。さらに、贄³⁾は、実習前の不安感を単語頻度解析での抽出の結果「関わり」、「新生児」、「不安」、「関わる+ない」、「記録」など新生児との関わりに対する不安を有していると報告している。

二川⁴⁾は、男子学生の実習に対する準備状態は、「男性であるという負の要因を自覚し、性差に関する戸惑いと不安」ある一方で「母性看護学実習への期待」であると述べている。

大野⁵⁾は、「性別の違いを理由とした看護対象としてイメージできない不安からくる学習への困難感」、「学びづらく難しい学問領域と感じる」、「興味はわからない」、「将来の看護師としての自分に関係ない」、「実習での看護展開に不安」、「男性であることを理由に拒否されるのではないかという不安」という困難感を抱いていると述べている。

2) 『実習中』

贄³⁾は、実習中の困難感を単語頻度解析での抽出の結果「対象者」、「褥婦」、「無い」、「多い」、「関わり」など[男子は記録に負担を感じている]とし、[男子のみで実習を行うため慣れない環境での対象者との難しさや電子カルテのパスワード解除という物理的環境に難しさを感じている]と述べている。一方で贄²⁾は、単語頻度解析で抽出の結果「新生児一看護」、「つながり一理解+できる」、「学生一必要」、「看護一経験+できる」、「観察一重要」で「対

象者との関わる中でその優しさに触れ学生としての実習前の不安は軽減されつつある」とも述べている。

また、二川⁴⁾は、外来実習では、「妊婦と関わった安心感」、「妊婦の気持ちと夫の役割」、「性差を超えてかかわることの困難さ」、「産褥実習に対する心構えと不安」があり、病棟実習では、「性差に適した看護の気づき」、「実践を通して理解した母性看護」、「生命への畏怖」、「他領域実習の学びの応用」であったと報告している。

大野⁵⁾は、男子学生は「対象が女性であることに対するやりづらさ」、「性差を強く意識した対象の見方」、「男性であるがゆえの実習上の制約」、「対象への看護が導き出せないことによる実習の不全感」があり対象者中心の考え方でなく自分中心の意識へと傾くことにより性差への意識が強くなり困難感を生じていると述べている。

3) 『実習後』

贄²⁾は、実習後の単語頻度解析での抽出の結果、「まじめ一実習+したい」、「育児休暇一とる+したい」、「実習前一意味+ない」、「精神的サポート一必要」、「男性一支える」、「視点一増える」が抽出され父親としての将来像についても考えがポジティブな思いに変化しているとし、さらに、贄³⁾は、単語頻度解析抽出での結果、実習後の成長感として「観察項目一理解+できる」、「新生児一関わる」、ウエルネス一理解+できる」などが抽出され、対象者との関わりを通じて母性看護に必要な知識の理解とそれに基づいた技術の習得ができていると述べている。

3. 【母性看護学実習における男子学生への教育的関わり】

対象論文2件(表2の論文番号6, 7)

佐藤⁶⁾は、男子学生がモチベーションを低下させる要因として、「妊産婦に不安を与えるのではないかという恐れ」、「将来につながるイメージが持てない母性看護実習」、「女子

学生より意欲が低いと思われることへの心配、「スタッフからの叱責による落胆」、「新生児との関わりで反応が女子と違うと感じる」という要因が影響することを示している。対策として「孤立感の軽減、自信が持てる関わり、妊産婦からの受け入れ状況の確認、スタッフの関係づくりに向けた支援が必要」と示している。

藤遼ら⁷⁾は、肯定的な体験は「自分が、実施可能なケアを適切に行えた時」、「分娩に立ち会い生命の重要性を感じた時」、「グループで協力して連携がうまくいった時」、「妊産婦に自分を受け入れてもらった時」としていた。そして「肯定的体験を得られるような環境調整や指導を行うことで学びを得られる」としている。

IV. 考察

男子学生の母性看護学実習に関する文献検索を行い抽出された7編の文献より男子学生への教育的な関わりへの示唆を得られた。

本研究の分析の結果、【男子学生の母性看護学実習の現状と課題】【母性看護学実習に対する男子学生自身の思い】【母性看護学実習における男子学生への教育的関わり】という3つのカテゴリーが抽出された。

1. 【男子学生の母性看護学実習の現状】

男子学生の母性看護学実習は、学生側と施設側の現状に分けられる。学生側の現状として性差からくる不安やとまどい・緊張などを感じながら実習を行っている。また「ケアも乳房や陰部など羞恥心を伴うものが多い」¹⁾。さらに「性差ゆえの実習上の制約や実習への不全感」⁵⁾や「記録への負担、対象者との難しさ」³⁾があるとしている。本学の男子学生においても実習中、性差によって受け持ちの選定や実習内容に制約を受けている現状にある。直接的な援助は見学やカーテン越しの実習を余儀なくされている。

贅は、「対象者との関わりにより、不安の軽

減や性差に適した看護の気づき、生命の畏怖を感じている」⁴⁾と述べているように、本学においても対象者との関わりが良好であれば授乳状況や子宮底の観察などができており学修の効果も挙がっている。

記録への負担については、母性看護学実習の対象は褥婦と新生児の観察であることから他の領域と比較すると、観察や記録が多いことは否めない。また、他領域では、看護過程は問題志向型であるが、母性看護学実習ではウェルネスの志向に基づき対象を観察する為、そのことに不慣れであることが考えられる。

施設側の現状として「男子学生の実習施設確保と実習展開が課題」¹⁾であり、「スタッフ自身も男子学生を無意識に男子という性で見ている部分がある」¹⁾と述べている通り、本学においても同様に男子学生の受け入れが困難である実習施設もある。

2. 【母性看護学実習に対する男子学生自身の思い】

男子学生の母性看護学実習の実習準備状態には、「性差に関する戸惑いや不安」^{2) 4) 5)}を抱えていると報告されている。本学でも実習前は、男子看護学生ゆえに受け持ちを拒否されるのではないかとの思いや同年代の対象者の援助に対しての抵抗感があると訴える学生も少なくない。また、実際に乳房の観察や子宮底の測定など、恐る恐る実施している学生も多い。

男子学生に実習前や実習中に学生自身の思いを傾聴し、不安を軽減させるような関わりをする必要がある。

3. 【母性看護学実習における男子学生への教育的関わり】

佐藤ら⁶⁾は、男子学生が母性看護学実習に対してのモチベーションを低下させる要因の一つとして、「将来につながるイメージが持てない母性看護学実習」「スタッフからの叱責による落胆」という要因が影響するとしている。一方で、「実習に対するモチベーションが高ま

ることで実習に対する困難感が軽減し学びも深まる」ことが示されていた。藤邊ら⁷⁾は、「学生の肯定的な体験がその後の実習意欲を高め実習効果に結びつき、肯定的体験を得られるような環境調整や指導を行うことで学びを得られる」と述べている。したがって実習では、学生が出来ているところを認め、さらに課題を明確にさせることで肯定的体験が増え実習意欲が高まると考える。

看護師として将来につながるイメージが持てない男子学生には、講義や演習、オリエンテーションの際には、看護師として産科病棟への就業はないが他病棟において妊婦・産婦・新生児への看護援助を行う可能性があること、援助などの実習と通して自身が父親になったときの将来像をイメージさせること、自分自身を含めたすべての人は、胎児や新生児を経験しているということ再認識しながら命の尊さについて考えることも効果的であると考える。

贅³⁾は、「知識詰め込み型を再考し講義・演習・実習の連続性を踏まえた学生主体的能動的学習を可能とする母性看護学教授が必要」と述べている。実習前は、男子学生の看護技術や演習で事前学習などの評価し、学生自身が自己の課題を明確にして実習に臨めるよう支援する。また、実習中は、比較的関わりに制限がない新生児看護において主体的能動的に実習できるよう配慮すること、ペアを組む女子学生との連携に指導的介入し、各々の成長を評価していくことで学生自身が達成感を得られやすくなるのではないかと考える。

VII. 結論

本研究では、男子学生の母性看護学実習における以下のような教育的な関わりへの示唆を得ることができた。

1. 講義や演習、オリエンテーションの際に看護師として産科病棟への就業はないが、他病棟においても妊婦・産婦・新生

児への看護援助を行う可能性はあることを指導していく。

2. 看護の対象である人間を理解する上で母性看護学実習を通じて命の尊さについて考えることの重要性を伝えていく。
3. 実習前には、学生自身が自己の課題を明確にして実習に臨めるよう支援する。実習中は、比較的関わりの制限が少ない新生児看護において主体的能動的に実習できる教育的関わりをする。
4. ペアを組む女子学生との連携に指導的介入し、各々の成長を評価していくことで学生自身が達成感を得られるように関わる。

引用参考文献

- 1) 羽田野花美, 末永芳子, 中島由紀子, 多久島寛孝「男子学生の母性看護学実習の現状と課題」保健科学研究誌 11, 1-7 2014 (再掲).
- 2) 贅育子, 小幡孝志, 室津史子 「母性看護実習における男子学生の思い」 ヒューマンケア研究会誌 5 (2), 29-36 2014 (再掲).
- 3) 贅育子「母性看護学実習において学生が抱く実習前の不安感, 実習中の困難感, 実習後の成長感と事前学習課題の理解度及び有効性から考察した効果的な学習支援」 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌 3 (1), 2018 (再掲).
- 4) 二川香里, 松井弘美, 長谷川ともみ「男子学生の視座から捉えた母性看護実習における学習過程」 母性衛生 55 (4), 659-66 2015 (再掲).
- 5) 大野理恵, 長鶴美佐子「男子学生が母性看護学実習前から実習終了までに抱く困難感」第48回日本看護学会論文集 看護教育 79-82 2018 (再掲).
- 6) 佐藤愛, 高橋由美子, 寄本飛鳥, 他 「母性看護実習での男子学生のモチベー

- ションに影響する要因」青森保健大学雑誌 18, 15-22 2018 (再掲).
- 7) 藤邊祐子, 坂本保子, 高橋雪子「母性看護実習において男子学生が肯定的に捉えた体験」八戸学院大学紀要 57, 145-151 2018 (再掲).
- 8) 厚生労働省「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告平成23年3月11日」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbk2.pdf> (回覧日 2019. 2. 1).
- 9) 人材確保法「看護婦等の人材確保の促進するための措置に関する基本指針」
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000103782.pdf> (回覧日 31. 2. 1).
- 10) 文部科学省「平成30年度一般社団法人日本看護系大学協議会定時総会 看護系大学の現状と課題」平成30年6月18日
- 日
www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/06/monbukagakusyoushou20180618.pdf (回覧日 2019. 2. 1).
- 11) 日本看護協会出版会編集『平成29年看護関係統計資料集』総数(年次別・就業場所別)
<https://www.nurse.or.jp/home/statistics/index.html> (回覧日 31. 2. 1).
- 12) 工藤優子, 五十嵐世津子, 赤石恵子, 他, 「男子学生の少数者としての経験—看護学生が捉えた経験との違い—」青森県看護教育研究会誌 40, 28-31 平成24年3月10日.

執筆者紹介 (所属)

坂本保子 八戸学院大学 看護学科 准教授
藤邊祐子 八戸学院大学 看護学科 助教
高橋雪子 八戸学院大学 看護学科 教授

坂本 保子・藤邊 祐子・高橋 雪子：
男子看護学生の母性看護学実習における現状と教育的関わりに関する文献検討

表2 男子学生の母性看護学実習における現状と教育的関わりに関する文献一覧

番号	著者	誌名	種類	掲載年	論文名	対象者・人数	目的	考察
1	羽田野花美 末永芳子, 中島由紀子, 多久島寛孝	保健科学研究誌 No11 pp 1-7	総説	2014	「男子学生の母性看護学実習の現状と課題」	男子学生	1. 母性看護学実習における男子学生の現状 2. 男子学生の母性看護学実習に対する妊産婦・褥婦の意識・態度 3. 男子学生の母性看護学実習を受け入れる施設の状態・意識・態度の3つの観点から見解を述べる	1. 男子助産師や男子学生の就職の選択がない状況, 男子学生の母性看護学実習における困難(少子化・高齢出産の増加, ARTによる出産, 男子学生の増加, 産科医療施設の減少など)は, 今後も予測されるため男子学生の母性看護学実習は, 看護教育制度の中で整理検討する必要がある。2. 対象や実習に対する丁寧・誠実・謙虚, 積極的な態度が肯定的感情へ変えることができる可能性がある。3. 母性看護の特徴, 領域での勤務実態もないことから施設やスタッフの負担は大きい。女子とペアであるが受け持ちや見学・実施はほぼできているため施設・スタッフの理解と多大な教育的配慮は大きい。
2	賛育子, 小幡孝志, 室津史子	ヒューマンケア 研究会誌 第5巻9号 pp 29-36	原著	2014	「母性看護実習における男子学生の思い」	男子学生9名	母性看護学実習に対する男子学生の思いを明らかにし実習展開の示唆を得る	実習前は, 性差による疎外感から不安を抱え, 実習中は, 対象者の関わりを通して, 学生にとって必要な経験として捉え, 実習後は, 母子並びの家族を捉えた学修につながりを深める。また父性の促進につながっていることが示唆された。
3	賛育子	岐阜聖徳学園大 学看護学研究誌 第二号 pp 1-10	原著	2018	「母性看護学実習において学生が抱く実習前の不安感、実習中の困窮感、実習後の成長感と事前学習課題の理解度及び有効性から考察した効果的な学習支援」	看護学科3年 次学生女子 92名男子24 名	母性看護学実習において学生が抱く実習前の不安感、実習中の困窮感、実習後の成長感を男女別に検討し、事前学習課題の理解度及び有効性を照合して、今後の母性看護学教育における学習や講義・演習の在り方に示唆を得ることを目的とする	男子学生が抱く困窮感は, 看護師を目指すものとしての意識ではなく, 一人ひとりの男性の意識で対象をとらえているために生じているのではないかと推測された。対象中心の考え方でなく自分中心の意識へと傾くにつれて性差の意識が強くなり困窮感が生じると考えられた。
4	二川香里, 松井弘美, 長谷川ともみ	母性衛生 第55巻4号 pp 659-66	原著	2015	「男子学生の視座から捉えた母性看護実習における学習過程」	看護大学4年 年生男子5名	看護系大学男子学生の母性看護学実習に対する準備状態と実習における学習過程を明らかにする	実習前の自己学習不足は, 記録に対する不安の誘因となり, 実習での学習効果を低下, 実習の大変さが残り人間的成長の妨げともなりうる。実習での学びは, それまでの準備状況が大きく影響, 学生の主体的能動的な学習を可能とする講義・演習の授業計画が不可欠。一連の経過としての内容を事前課題として提示する。演習で使用した内容の理解度が高くアウトプット型学習の有効性が示されたことから知識詰め込み式中心の教育を再考し講義・演習・実習の連続性を踏まえた学生主体的能動的学習を可能とする母性看護学教授の必要性が示唆された。
5	大野理恵, 長嶋美佐子	第48回日本看護 学会論文集 看護教育 pp 79-82	原著	2018	「男子学生が母性看護学実習前から実習終了までに抱く困難感」	男子学生9名	実習前から実習終了までの男子学生が抱く学習への困難感を経時的視点で明らかにする	男子学生の学習効果を実習展開と高めるには, 学生の性差に配慮した教育的かかわりが必要。実習前は, 男子学生の情意面を捉えて動機づけにつなげ, 妊娠から産褥への流れに沿った実習展開とし, 対象との関わりをきかしくすることが重要であると示唆された。
6	佐藤愛, 高橋由美子, 寄本飛鳥, 大井けい子	青森保健大学雑 誌18巻 pp 15-22	原著	2018	「母性看護実習での男子学生のモチベーションに影響する要因」	男子学生15 名	男子学生のモチベーションに影響する要因について明らかにしそれら要因の対応策を検討する	教員の支援として男子学生の学習に関する思いの理解, 男子学生に対する妊産婦の受け入れ状況の十分な確認, スタッフと男子学生の関係づくりへの配慮, 男子学生の感動体験と自信を促進する支援, 男子学生の孤立感の軽減する支援が必要と考える。
7	藤邊祐子, 坂本保子, 高橋雪子	八戸学院大学紀 要57号 pp 145-151	原著	2018	「母性看護実習において男子学生が肯定的に捉えた体験」	男子学生7名	男子学生の母性看護学実習における実習指導の在り方、実習展開の方向性を見出す	実習前: 看護チームの一員としての意識づけや自覚を促す。対象者により多くのケアが実践できることを伝える。実習中: 産科病棟で配慮すべき点を確認, 学生の不安や心配を受け止め早期に対処。トラブルの確認, メンバー間と連携を促す。肯定的体験を早期に察知し次の学習につなげる。実習後: 経験事項を振り返り, 母性看護学実習の意義を考えるように促す。命の尊厳について考え, 表現させる。肯定的体験を得られるような環境調整や指導を行うことが必要であると考えられる。